

栽培豆花 山桜の里 戸赤

今のところ 順調

受粉した花が収まり実の形成が始まった花豆。生育は今のところ順調といい状態にあります。一段目の花から二段三段と繁茂し、結実が進んでいくこととなります。今年は雨が少ない梅雨時期となっていますが、気候をみながら実入段階の肥培管理に気が抜けない毎日です。一般的に苦土成分が少ないといわれる畑がどの程度改良されてきているかなど、毎々が勉強の連続です。



花豆花ざかり(6月22日現在)



受粉した花の後には、さやが形成され始まった花豆



古峯神社へ参拝旅行(6月11日戸石)

ちよつとひと休み 村の懇親旅行

田植えが終わり一息ついた6月11日、戸石の皆さんは楽しみにしていた古峯神社への参拝旅行で英気を養いました。数年前までは正月に代表交代制での参拝でしたが、最近は集落全員で懇親を深める機会となっています。

【木地の学習No.32】文化元(1804)年三州上津具村(現・愛知県北設楽郡津具村)に端を開いた両所の相剋は江戸の裁判にまで発展した。文化四年に判決がでて、両者は表面上融和の形を取り、君ヶ畑氏子狩帳三〇号簿冊(文化五年)～三三三号簿冊(文化十二年)は「大皇大明神、筒井八幡宮両社務」の名で行われている。蛭谷側にこの間の氏子駈帳はない。君ヶ畑保管となったのであろう。文政十年には両所それぞれ氏子狩帳を作成したが、融和の形は続いており、この時発行した両所別々の印鑑は、二枚合わせて割印が押され符合するようになっている。両所は同時期に会津に来ているが、現存する数組の割印付印鑑を検討してみると、どうも別行動で木地小屋を順回しているようである。共に相手方の印鑑を持ち、順回したそれぞれ的小屋で発行したと思われる。君ヶ畑で発行したものは丸の割印一ヶ所、蛭谷は角の割印二ヶ所となっていることから推察できる。君ヶ畑が会津で氏子狩をしているうちに、蛭谷は宮城、秋田、山形を順回している。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) <つづく>

旭田小3の学年行事

54人の
思い出



6・8山桜学校多目的ホールで工作を楽しむ (旭田小3年)

昼食におにぎり持参、トン汁は山桜学校で作ってもらい、旭田小3学年行事の児童と保護者54人は、竹とんぼや牛乳パックを利用した笛作りなどで楽しみました。



〔4・21発行 河北ウィクリー(仙台別冊)下郷の旅には、歴史、自然、美味、花、五感を刺激する楽しみが数多く待っている〕と紹介され、戸赤の山桜も載っています



戸赤のヤマザクラが山を深いピンク色に染める

春の到来と共に、町は鮮やかな花の色に染まる。それぞれ趣きを楽しんだ名所を訪ねてみよう。

花咲きほれる 里山の春の訪れ



香りが豊かでのどこの臭い(手打ちそば)

者の名をとってしんろうと噂されるようになったのが、アツアツをほお張ると、口いっぱいに広がるじゅうねんの香り。人気のデリックアウトがルメだ。



森取火地区には11カ所ものカタクリの野生地が広がる

戸赤地区のオオヤマザクラが見頃を迎えるのは4月下旬から5月上旬にかけて、このヤマザクラは重落で100年以上も大切に守られてきた。いわば象徴だ。100本のヤマザクラが、薄紅の花を斉に

咲かせるさまはまさに山村の春、といった風情を漂わせる。時期を同じくして、すぐ隣りの麓取火(くわとび)地区ではカタクリの花が満開となる。昔ながらの製法で復元された水車を



芝桜の花のメジャータンが広がる「花の郷公園」

目印に約2.0の遊歩道を往くと、そこに広がるのはカタクリが地味いっばいに群生する姿。たおやかに咲くその可憐な花姿を一目ようと、例年多くの人を集めている。ゴールデンスプリング時期には「カタクリまつり」も催され、薬取火地区産の山菜などが販売される。

中山集落では、「花の郷公園」の芝桜が見事な時期。さまざまな季節の花が目を惹きつけるこの公園にあつて、特にじゅうたんを敷き詰められたように咲く芝桜は地区の名物となっている。敷地内の「三彩園」では、地元特産のそばや会津地鶏の定食が食へられるほか、じゅうねん味噌、しそジュースといった地場産品の購入も可能だ。



白い花、緑の草、青い空が見事な「頂上台地」

(ストーリー性のある村づくりのために【No.3】・紅梅御前)やがて王は、里人らのすすめに従って大内村から倉谷を通り、安張、沢口、磯上、志源行、石井、日影、原を経て戸石でお泊りになり、次の日は道を変えて西進された。従者であった有光もまた王を追ったが、只見郷の手前のところで有光はあ渡部丁七という者の手によって首を掻つ切られ、王は無事に小国城へと落ち延びられたのであった。紅梅御前と桜木姫 ところで、この以仁王の跡を追う一団の人々があった。それは王を慕う妃の紅梅御前と、侍女の桜木姫、それに供の者たちであった。彼女らは、白河の関より岩瀬郡の逢坂峠や蟬峠の難所を超えてようやくのことで大内村にたどり着かれた。しかし無情なことに、王はひと足違いで越後へと西進された後であった。恋しい王の跡を追ってようやくこの戸右衛門宅にお着きになった妃たちは、長旅の疲れと、王に逢えない絶望の気持ちとで眼の前から急に光明の消えたような思いであった。そして八月二十六日、もともと病弱であった侍女の桜木姫はこの地においてにわかに病没された。姫の哀れさもさることながら、もともと力を落とし悲嘆にくれたのは紅梅御前であった。(会津の歴史伝説—とっておきの33話—・小島一男著) (発行所歴史春秋出版株式会社)